

治療法を決めるのは、より良い人生のため

- あなたの大切なものを守るため、医師と目標共有を
- 悩んだらセカンドオピニオン
- ただし医師の変更が希望なら、受診の最初からやり直しを

さて、いよいよ治療法の決定です。医師が治療方針を説明し同意を求めます。インフォームドコンセントです。

医師の説明に対して、納得がいった場合、治療方針があなたの希望とも一致した場合には、すんなり決めてしまつて問題ないでしょう。特に、早期の固形がんで、医師が「簡単に切除でき、手術さえ乗り切れば治癒の可能性が高い」と言っているなら、あまり迷うことなく、手術でお任せしてしまつてよさそうです。

しかし、難しいがんで「簡単」な治療法がないか、逆に有力な治療法が複数存在する場合、悩む価値があります。

まずは「何をめざして治療するのか」、目標を明確にすることが大切です。ステージや発生部位、がん細胞の性質などによつて、治療内容や、できることは大きく違ってきます。

誰しも「根治」を選びたいところですが、がんの状態や体力を把握した上で、現実的な選択をすることが肝心。現在のところ医学的に有効性を認められたがん治療は、どんな形にせよ必ず身体へのダメージを伴います。非現実的な目標設定をすると、苦痛ばかり大きくて、効果が上がらなかつたり、QOLまで損ないかねません。

なお、どこに目標設定した場合でも、治療やがんによる苦痛の「緩和」は並行されます。「緩和」の中には、痛み止めなどの薬を使うだけではなく、治療に取り組む気持ちを継続できるように支える精神的支援なども含まれます。

医師と共通の目標が設定でき、それでも判断や治療方針などに気にかかることがある場合、あるいは医師からの説明に今ひとつ納得できなかつたり、他の治療の選択肢がないかと悩むような場合には、他の専門医ならどのような判断するか相談できる「セカンドオピニオン」を活用しましょう。遠慮する必要はありません。セカンドオピニ